

## 奉仕の報い

「人の子は仕えられるためではなく、仕えるため、また多くの人の身代金として自分の命をささげるために来たのである。」

マルコによる福音書 10:45

イエスの宣教は終わりに近づいていた。三年以上もの間、主は弟子たちを召し、教え導いてこられた。弟子たちはついに、イエスこそがメシア、神のすべての約束を受け継ぐ者、メシアの王国を築き、死者と生ける者を含む人類のすべての家族を祝福する方であると認めるに至った。創世記22:18; ガラテヤ3:8

主は特に彼らに、忠実であれば御自身の御座に共に座ると約束された（マタイ19:28）。しかし、御国が霊的なものであり、彼らがその御国に与るには「最初の復活」による「変容」が必要であることを告げてはいなかった。（コリント人への第一の手紙15:51,52；黙示録20:6）また、彼らが御国に与り、御国そのものが人々の間に確立されるまでに、一つの時代が介在するという事実も、まだ彼らに明らかにしていなかった。しかし、彼はこれらすべてをほのめかしていた。彼はこう言われた。「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それを負うことができない。しかし、あの方、すなわち真理の御霊が来られたとき、...その方が、これから起こ

ることをあなたがたに告げ知らせるであろう。」  
ヨハネ16:12,13

しかしイエスは、弟子たちが完全に打ちのめされ落胆しないように、彼らが必要とし、理解すべき知らせの一部を伝え始めた。エルサレムへ上ることを告げ、多くの苦しみを受け殺されると語った。いつも勇敢なペテロは、この時厳しい叱責を受けた。彼は師を正そうとした。「決して、主よ！ そんなことは起こりません！」 「そんなことがあなたに起こるはずがありません！」 ペテロはイエスがイスラエルのメシアであり、まもなく御国を建てられると信じていた。主が殺されるなど、彼には考えられないことだった。しかしイエスはペテロを叱りつけられた。「サタンよ、私の後ろに下がれ。あなたは私のつまずきの石だ。あなたは神のことではなく、人のことを考えているからだ。」 マタイによる福音書16章21-23節

この同じ教えの中で、イエスは「三日目に復活する」とも述べられた（マタイ16:21）。しかし弟子たちはイエスが死ぬという考えを受け入れられなかったため、この追加の言葉もまた、彼らには主の「難解な言葉」のように思えたに違いない。おそらく彼らは別の機会にイエスが語った言葉も思い出していた。「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちにいのちはない」（ヨハネ6:53）。これもまた彼らが理解できなかった難しい言葉だった。

弟子たちが主の言葉の意味を理解できなかった場面は数多くあった。彼らの期待とはかけ離れているように思えたのだ。彼らの称賛すべき点は、イ

エスに従い続ける十分な信仰を持っていたことだが、主が語られた言葉をどうして理解できたのだろうか。ペンテコステの後になって初めて、彼らは状況とイエスが告げられたことの真意を完全に把握したのである（使徒2:1-4）。そこで聖霊は、神の計画の新たな側面を明らかにし始めた。すなわち、キリストの苦難（その体である教会を含む）が先に訪れなければ、王国の栄光が明らかにされ、世界への祝福が始まらないという事実である。ペテロの手紙一 1:11

## 右と左について

別の福音書によれば、ヤコブとヨハネの母が彼らと共に来て願いを述べた。「どうか、この二人の息子を、あなたの御国で、一人はあなたの右に、もう一人は左に座らせてください」（マタイ 20:20,21）。彼らは、御国の栄誉が分配される時が間近に迫っていると信じていたのである。この二人の愛すべき弟子たちが、単なる野心から主の最も近い地位を求めたとは考えなくてよい。むしろ、彼らは主を深く愛していたからこそ、他の弟子たちよりも主の近くにいることをより深く味わえると思ったのだ。実際、十二使徒の大多数よりも近くにいることを許されていた。主は幾度かの特別な機会に、ペテロと共にこの同じヤコブとヨハネを連れて行かれた。彼らは聖なる山で、またヤイロの娘がよみがえった時、ゲッセマネの園でも主と共にいた（マタイ 17:1-5、ルカ 8:41,42,49-56、マルコ 14:32-34）。彼らは主が深く愛された忠実な弟子たちであった。

イエスの言葉を注意深く見よう。主は、御国には重要な地位があるが、それは御自身ではなく父によって与えられると宣言された。「わたしの右と左に座することは、わたしが与えることではない。わたしの父が備えられた者たちに、それが与えられるのである。」（マタイ20:23）

父なる神は絶対的な正義と義の代表者としておられます。千年王国の天上の段階における地位は、その形態がどうであれ、単なる寵愛によって与えられるのではなく、忠実さと資格に基づいて与えられ、すべては恵みによるのです（エペソ2:8）。主イエスご自身が最も高い地位を占められるのは、ご自身がそれにふさわしい方だからです。

「屠られた小羊は、力と富と知恵と力と誉れと栄光と祝福を受けるにふさわしい。」（黙示録5:12）。確かに、父は私たちの主に栄光と大きな誉れを与え、御自身の右の座に高く上げられました。御国の栄光の頂点は、キリストの体である教会が完成し、すべての「召され、選ばれ、忠実な者」が約束された「いのちの冠」を受けるときに訪れます。（黙示録17:14; 2:10）

## ここでいう王国とは

何世紀にもわたり、キリスト教徒の間では、イエスや使徒たちが頻繁に言及したメシアの王国について混乱が蔓延してきた。しかし、当初は混乱はなく、イエスの時代から約200年間も混乱はなかった。初期教会は、メシアが二度目に来られるという約束を十分に理解していた。彼は教会を栄光のうちに迎え入れ、世界の支配と万物を神の御心に従わせるための神の力の王国を確立する。そして

彼らは、このメシアの王国がその使命を果たすのに千年の時を要することを知っていた。ヨハネ 14:2,3; マタイ 25:31; 黙示録 20:6

しかし次第に、地上の教会がメシアの王国として組織化され、イエスの再臨前に世界を征服するという理論が生まれた。この非聖書的な見解は教会史の全流れを変えた。もはや福音宣教は、「小さな群れ」を呼び集め、耳を傾け心を開く者たちを完成させ、彼らを王国の栄光に備えることを目的としなくなった。(ルカ 12:32)。むしろその方向性は劇的に転換した。以後、教会は世俗的権力の掌握を目指すようになった。陰謀が企てられ、虚偽の主張がなされ、王や国家を支配下に置こうとする試みが繰り返された。迫害が利用され、可能な限り世俗の支配者たちを誘惑し脅迫して、教会による世界支配の確立を図ったのである。

一時、これらの企ては繁栄したが、十九世紀初頭以降、教会による地球支配の思想はほぼ消滅した。その結果生じた混乱の中で、多くの人々はメシアの王国への信仰を完全に失い、キリストの再臨を待ち望む者はほとんどいない。困惑の中、ある者は霊的王国を単に信者の心の中に宿るものとして論じる。またある者は、キリストの王国が今や世界の主要な政府に体現されていると信じる。しかし、メシアの王国の特定の部分が、同じ王国の他の部分と戦争したり破壊したりする可能性のある大軍を築いている理由を考えると、彼らはさらに混乱する。

こうした混乱の結果、多くの名ばかりのクリスチャンにとって、聖書の教えは単に一貫性や論理性

を欠いているように映る。そうでなければ、ヤコブやヨハネ、その他の使徒たちが統治する王国が存在しなければ「十二の玉座」に着くことはできないと理解するはずだ（マタイ 19:28）。また、主の祈り「御国が来ますように。天におけるごとく、地においても御心がなされますように」（マタイ 6:10）。神の救いの計画をより深く知り理解しようとするなら、私たちは聖書を畏敬の念をもって学び、日々「聖書を調べ」続けねばなりません。（ヨハネ 5:39、使徒 17:11）。そうすることで、私たちは大きな祝福を受け、メシアの栄光の王国が、まだ地上に確立されていないにもかかわらず、「近く、まさに戸口にある」ことを悟るでしょう。マタイ 24:33

## 「できるか」

御国において主のすぐそばの特別な位置を求められた二人の愛する弟子とその母に、イエスは天の御国におけるいかなる地位も特定の条件を満たす必要があると明らかにされました。弟子として召されただけでは不十分でした。主に従うためにすべてを捨てたこと、主と共に過ごし、教えを学び、それに同意したことだけでは不十分だったのです。それ以上の何かがなければ、彼らは御国の霊的な段階に入ることができないかもしれない。

主はこの条件を宣言し、こう言われた。「わたしが飲む杯を飲むことができ、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」（マタイ 20:22）。これは何を意味するのか？イエスが言及した「杯」と「バプテスマ」とは何か？それはイ

イエス自身だけでなく、忠実な従者となる者たちにも適用されると言われたが、その重要性とは？

我々はこう答える。イエスの「杯」とは、彼が別の箇所と言及した「わたしの父がわたしに与えられた杯を、わたしが飲まないはずがあるか」

(ヨハネ 18:11) という杯のことである。神の計画において、世界の祝福のためにメシア的王国の栄光と誉れと力を委ねられる者は、まずその誉れと栄光に値する忠実さを示さねばならないと、神は既に定められていた。イエスご自身の場合、この杯とは、地上での三年の半ばにわたる宣教期間中に忠実に耐え忍んだ、奉仕、辱め、恥、犠牲、苦難といったあらゆる経験の総体を意味した。そしてカルバリの丘で「成し遂げられた」と叫ばれた時、彼はそれらを完全に成し遂げたのである (ヨハネ19:30)。

キリストの弟子として、私たちは主が示された模範に従い、主が経験されたのと同様の試練を通らねばなりません。主の足跡をたどり、苦しみと犠牲と奉仕において忠実さを示して初めて、主の御国における栄光と誉れと力において主と共に相続人となることに成功するのです。ローマ8:17; IIテモテ2:11,12

イエスが「わたしが受けるバプテスマ」について語られたとき、それは犠牲的な死へのバプテスマを指していました。彼はその後間もなく再びこう語りました。「わたしには受けるべきバプテスマがある。それが終わるまで、わたしはどれほど苦しんでいることか！」 (ルカ12:50)。主の宣教開始時の水による洗礼は、真の洗礼の単なる象徴に

過ぎなかった。水に沈み、水に葬られ、水から上がることは、犠牲的な死へと沈み、そこから復活することを表していた。死への真の洗礼は、ヨルダン川からカルバリまで、三年半にわたって進化した。十字架上で「成し遂げられた」と叫ばれた時、主は死への洗礼が完了したことを意味された。主は三日目（ ）に父の力強い御力によって、その死の洗礼の状態から引き上げられ、右の座に着かれた。この地位は永遠に保たれる。エペソ1:19-22; コロサイ3:1; ヘブル1:1-3

これがイエスのバプテスマであった。それはこの世のあらゆる権利を完全に放棄することを意味した。今、彼は愛する弟子たちに問うた。彼らがこの程度まで従う覚悟と意志があるかどうかを——すなわち、奉仕と犠牲と苦難の杯を分かち合い、死へのバプテスマに与る覚悟があるかどうかを（ローマ6:3-5）。ただ忠実に彼に従うことによつてのみ、彼らは天の御国に与る希望を持つことができた。この原則はイエスに従うすべての者に当てはまる。彼の杯を飲むか否か、死へのバプテスマに与るか否かは、私たち一人ひとりが決断すべきことである。謙遜で自己犠牲的な者だけが、そのような経験に入る能力と意志を持つだろう。

前述の考えを、多くの人々が抱く王国観に当てはめてみると、次のような疑問が適切に浮かび上がる。そうした考え方は、この世の様々な王国に当てはまるだろうか？この世の指導者たちが統治する前に、キリストの死に至る苦しみと犠牲に与る必要があるだろうか？キリストの教会と呼ばれる地上の組織に属するには、大きな困難を伴うのだ

ろうか？そこに入るには自己否定が必要だろうか？ 彼ら全員が洗礼によってキリストと共に「葬られる」のか—すなわち彼の死へと？彼らは皆、彼の苦しみに与るのか？決してそうではない！天の王国に対する正しい見解のみが、これらの様々な主張と整合する。我々は、それが「高価な真珠」であり、それを得るためには他の全てを犠牲にしなければならないと悟らねばならない。マタイ13:46

## 「私たちはできる」

この出来事の記述において、弟子たちはイエスに「私たちはできる」と答えました。つまり、彼らは主の杯を飲み、主のバプテスマにあずかることを進んで引き受ける意思があったのです（マタイ20:22）。彼らはその意味を明確に理解していなかったが、イエスが命じることは何でもできるし、喜んで行う覚悟があった。このように、あの忠実な弟子たちのように「大いなる勝利者」となり、贖い主と共に、その「からだ」である教会に約束された栄光、誉れ、不死を分かち合う者たちすべてが、そうあるべきである。ローマ8:37; 2:7; 1コリント12:27

検討中の記述において、イエスは弟子たちにこう答えられた。「あなたがたは、わたしの飲む杯を確かに飲むであろう。また、わたしが受けるバプテスマでバプテスマを受けるであろう」（マタイ20:23）。主が弟子たちに合理的に求められるのは、彼らの側におけるその意志だけである。私たちには、イエスが持たれた力と能力は誰一人として備わっていない。私たちは本質的に罪人であ

る。イエスは「聖く、罪がなく、汚れがなく、罪人から離れておられる方」（ヘブル7:26）であった。ゆえに私たちにできるのは、正しいことを行おうとする意志を委ねることだけである。主は私たちを御自身の御手の中に迎え入れ、苦難と経験の学校へと導かれる。そして死に至るまで忠実さを証明するために必要な教訓を与えてくださる。墮落した人類の一員としての私たちの弱さゆえに、神が救い主において「憐れみ深く、誠実な大祭司」を備えてくださったとは、なんと恵み深いことでしょうか（ヘブル2:17）。こうして、イエスを通してのみ、私たちは天の御国に到達することを望み得るのです。

## 大いなるしもべ—最も尊ばれる者

他の使徒たちは、ヤコブとヨハネが母と共にそのような願い事をしたことに憤慨した（マタイ20:24）。しかしこの出来事は、メシアの王国における偉大さの基準となる指針を、イエスが示す機会となった。謙遜と愛をもって最も多く他者に仕える者は、それによって神に対してより高い地位にふさわしいことを示しているのだ。（ガラテヤ5:13）これは、イエスが言うように、通常の世界のやり方とは異なる。世の支配とは、他者に仕えることではなく、仕えられることであるからだ。（ルカ22:25,26）

御国の原則は、最も多く仕える者が最高の栄誉を得るというものである。イエスご自身が、あらゆる者の中で卓越したしもべであられる。ゆえに、神の定めにより、御国においてイエスの地位は最も高く、他の者たちは、愛と奉仕と従順と忠誠と

いうイエスの御霊をどの程度備えているかに比例して、イエスの次に位置づけられる。主は弟子たちにこう言われた。「わたしに仕えたいと思う者は、わたしに従いなさい。わたしのしもべは、わたしがいるところになければならない。そして、わたしに仕える者を、父は尊くしてくださる。」ヨハネ12:26